

雨宿りの箱庭

集合的無意識に潜むリセットの秘策を探る

森下 温美

(関西医療学園)

I. はじめに

本報告は、筆者が『雨宿りの箱庭』と名づけている DV (domestic violence) シェルターでの箱庭の第7報である。

DV シェルターの事例は、一般の事例と違い、箱庭作品そのものになぜか注意が向けられず、感情的な先入観や偏見に終始される傾向が強い。貴重な先行研究の更新どころか現象学的方法や傾聴に徹するという臨床の基本姿勢さえ、専門家に吹き飛ばされてしまうその威力には凄まじいものがある。箱庭のスライドを見せることが、リトマス試験紙のように感性を判別する指標になることや二次被害の問題の深刻さ、翻って DV 問題の根深さを思い知ったというのが過去 6 回の報告による第一の収穫であった。しかし、それでは被害者に対しあまりに申し訳ないので、今回は報告の仕方に工夫を加えることで、何とか内容に踏み込んだ議論をしたいと考えるに至った。それが、全身全霊で努力している被害児らの宇宙(河合 1987)への敬意につながると思うからである。

II. 事例の概要

クライアント(以下 CI と表記)は小学校一年生の男児である。外国人の父親と器質的に発声できない母親との間の一人子であった。母親の生育歴にも過酷なものがあり、現在もそれは継続している。寄る辺のない CI は、シェルターに避難してさえ、いじめっ子の格好の標的にもなっていたが、懸命に光を見出そうとしながら、変容していった。

III. 面接経過

#1 箱庭① 箱庭を見学に来室し、「絶対したい」と気に入って、取り組み始めた。山ができ、動物が置かれるうち、登場した二匹の狼は「食べたい」「獲物探してる」と言い、鹿は怖いから「逃げたい」。急に「ぼくなあ、三歳のころ牛のパジャマ着てん。おばあちゃんが買って来て、今はこんなん(ひざ下)。でも赤ちゃん生まれたら着せたらええやん。もったいないし」と話し出す。ユニークな内容につい

〈弟がいい?〉と言うセラピスト(以下 Th と表記)には、「絶対弟。妹は嫌い。絶対嫌い嫌い」とはっきりしている。パシャモを見て、「いいなあ」と言いながら、自分の両の耳を引っ張り「長ーい」と言う。面白いが、痛くないのかと不安に思いながら、〈大きいのは悪くないけど〉と言うと、「お金持ち!」と言う。お金持ちになりたいからそうしているのだというらしい。

途中、母親が来室した。発音が不自由で、ゼスチャーを交えながら、(CI が楽しそうに過ごして嬉しいうい)気持ちを伝えたかったのだと言われた。

箱庭の途中で CI はミニカーの「ポルシェが欲しい」と駄々をこねる。全身を揺すりながら「欲しい。欲しい。どんなにお願いしてるか。あかん?」と真剣で、どうも箱庭制作どころではない時間があつた。〈此処に来るお友達は、お部屋におもちゃないやろう〉と諭すとそれは理解できるが、でも欲しいという気持ちは抑えがたいようで、「もうこ(来)うへんで」と軽く威したりしながらも、〈仕方ないなあ〉と呆然とする Th になぜか納得して、退室した。

#2 12 日後 箱庭② Th が帰宅する時間になって、他児と一緒に来室し、再びミニカーが欲しいと言う。あげるわけにはいかないかと答え、「来ないといってもだめ?」と言ったあと、観念して、箱庭をすることになった。制作しながら父親とよく行くお寿司屋さんの話をする。「自分で取るねんで」と教えてくれ、〈いいなあ〉には得意気だった。途中で母親が来室し、胸を押さえながら、いなくなると不安になり、いじめられているのではないかと心配したのだと訴えられた。Th が何度も何度も謝ると、安心したからもうよいけれど、ただ不安で怖かったのだと告げられた。

箱庭では恐竜が登場する一方でおじいさんがのどかに読書しているのに気づき、「おじいさんが危ない」と言う様子には、今にも降り出しそうな気配があつたので、〈気づかないっか〉と言うと、そういうことにしかけるが、無理を感じ、「やっぱこれは気づく。どうしよう」とべそをかき、ミニカーが欲しいと言ったと

きのように Th にもそれをぶつける。

—絶体絶命—

#3 一週間後 箱庭③ 午前中ふらつとやってきたので、昼食後においでと約束した。なかなか来ないので誘いに行くと、「やめとく」と言ったが、すぐ母親に身振りで行っておいでと背中を押され、立ち上がった。母親はニコニコと送り出していた。

山から作り始めたのだが、最初からダイナミックで、エネルギーにあふれていた。クリスマスツリーを置いてから、「ありえない」と言う。〈ありえない世界もありだ〉と言ってみたが、「今日は本当の世界にする。人間がいらない動物の世界にする」と言いながら、仕上げた。それは箱庭②の問いに関する CI なるの答えだったのだが、さて、それはどんな結末であつたか。さらには現在の CI はどんな子どもになっているのか等については当日紹介することにする。

IV. 考察

1. 先入観なしに寄り添う態度の重要性

ユング心理学の夢解釈がフロイトの精神分析と異なる点は、無意識を一方的構子定規的に嵌め殺すような解釈をするのではなく、CI と Th が対等な立場で事象そのものに相対し、そこに潜む多義的な意味を考え活かしながら、CI の心の中で巻き起こっていることを自己治癒的に方向づける点にあるだろう。しかし現状はせつかくの事例という現実を見ようとせず常識的解決でよしとしたり、【心不可得】とするなどの知性化が横行している。

2. 1. によって観えてくる異熟の原理

歴史的な源泉である哲学や宗教に還って考察するしかない性質のこころ(大拙 1954)の分析には補充法しかない。ただ、イメージ表現に神仏そのものが置かれるならば、わかりやすいのだが、現実はそのようではなく、阿頼耶識は異熟するのであり、既に仏教すら易学と融合しつつ、見立てやモドキとしてある意味では隠され(吉野 1992)、現代的な事物と重ね合わせながら具体的な表現として結実している。絶対絶命の境地からの脱出時ですらその例外ではなく、むしろそんなときこそ、駄洒落やユーモアを加味しながら、次元の違うものを一緒くた(一即多)にしつつ、小さな自我を救うといった原理がみられる。CI を脅えさせたゴリラに実際に襲われたかつてのフィールドワーカーたちもまた、顔面蒼白かつ必死の形相で逃走したつもりが、VTR に残る笑顔を見て驚いたという

よく知られたエピソードに見られるような反動形成の普遍性が日本人の無意識の異熟の仕方にはある。

3. CI の分身であるおじいさんを救ったもの

CI の魂を救うのに動き出した元型にはまだ名前がないのだが、成分は以下のようなものかもしれない。

①お供え 日本人には、神にお供えして待つという普遍的な祈りのスタイルがある。父親と一緒に食べたお寿司などを含んだお供え物の内容を観察することは異熟の原理に接近することにつながるだろう。

②火 易学的には火は女性であり、神であり、毘盧舎那仏を代表とする華嚴の世界の神々しさや太陽神アマテラスのイメージにも重なる。『崖の上のポニョ』でポニョを守ろうとする宗介をクライマックスでバックアップしたのは偏屈なトキ(ハイブリッドな命名)さんだったが、CI のおじいさんを救う成分を結集させ、最後の最後に背中を押したのも現実と非現実における 2 人の女性であった。

③太鼓 幽霊(アニマ)は神出鬼没にみえて、実は太鼓がないと出現できないという暗黙のルールに縛られている。非現実的象徴の世界が開演する合図であり、木気(春の息吹のようなもの)の象徴でもある。

④二重世界 二人のおじいさんを繋ぐもの 自分で作った創造の世界に飛び込み、全身全霊で脅えながら、答えをつかんだ CI には敬意を表したい。その姿はまるで千尺の崖の上から横超する木にかじりついている小僧さんの抱える公案(百尺竿頭)のようで、二元(適応)論では絶対解けない。しかし箱庭②の問いの中にはすでにその答えが含まれており、予定調和的に得心したのである。日常と非日常をつなぐ平常底という場所もまた百尺竿頭のな答えと一緒に存在している。

V. 文献

- 河合隼雄(1987)子どもの宇宙 岩波新書
 河合隼雄(1988)明恵を語る 日本放送出版協会
 上田閑照(編) 西田幾多郎哲学論集 岩波文庫
 鈴木大拙(1954)禅とは何か 角川文庫
 水野弥穂子(校注) 正法眼蔵 岩波書店
 竹村牧男(2002)ブッダの宇宙を語る 華嚴の思想 日本放送出版協会
 横山紘一(2001)心の秘密を解く 仏教の深層心理・唯識 日本放送出版協会
 吉野裕子(1992)隠された神々 古代信仰と陰陽五行 人文書院

雨宿りの箱庭

集合的無意識に潜むリセットの秘策を探る

森下 温美

(関西医療学園)

I. はじめに

本報告は、筆者が『雨宿りの箱庭』と名づけている DV (domestic violence) シェルターでの箱庭の第7報である。

DV シェルターの事例は、一般の事例と違い、箱庭作品そのものになぜか注意が向けられず、感情的な先入観や偏見に終始される傾向が強い。貴重な先行研究の更新どころか現象学的方法や傾聴に徹するという臨床の基本姿勢さえ、専門家に吹き飛ばされてしまうその威力には凄まじいものがある。箱庭のスライドを見せることが、リトマス試験紙のように感性を判別する指標になることや二次被害の問題の深刻さ、翻って DV 問題の根深さを思い知ったというのが過去 6 回の報告による第一の収穫であった。しかし、それでは被害者に対しあまりに申し訳ないので、今回は報告の仕方に工夫を加えることで、何とか内容に踏み込んだ議論をしたいと考えるに至った。それが、全身全霊で努力している被害児らの宇宙(河合 1987)への敬意につながると思うからである。

II. 事例の概要

クライアント(以下 CI と表記)は小学校一年生の男児である。外国人の父親と器質的に発声できない母親との間の一人子であった。母親の生育歴にも過酷なものがあり、現在もそれは継続している。寄る辺のない CI は、シェルターに避難してさえ、いじめっ子の格好の標的にもなっていたが、懸命に光を見出そうとしながら、変容していった。

III. 面接経過

#1 箱庭① 箱庭を見学に来室し、「絶対したい」と気に入って、取り組み始めた。山ができ、動物が置かれるうち、登場した二匹の狼は「食べたい」「獲物探してる」と言い、鹿は怖いから「逃げたい」。急に「ぼくなあ、三歳のころ牛のパジャマ着てん。おばあちゃんが買って来て、今はこんなん(ひざ下)。でも赤ちゃん生まれたら着せたらええやん。もったいないし」と話し出す。ユニークな内容につい

(弟がいい?)と言うセラピスト(以下 Th と表記)には、「絶対弟。妹は嫌い。絶対嫌い嫌い」とはっきりしている。パシャモを見て、「いいなあ」と言いながら、自分の両の耳を引っ張り「長ーい」と言う。面白いが、痛くないのかと不安に思いながら、〈大きいのは悪くないけど〉と言うと、「お金持ち!」と言う。お金持ちになりたいからそうしているのだというらしい。

途中、母親が来室した。発音が不自由で、ゼスチャーを交えながら、(CI が楽しそうに過ごして嬉しいうい)気持ちを伝えたかったのだと言われた。

箱庭の途中で CI はミニカーの「ポルシェが欲しい」と駄々をこねる。全身を揺すりながら「欲しい。欲しい。どんなにお願いしてるか。あかん?」と真剣で、どうも箱庭制作どころではない時間があつた。〈此处に来るお友達は、お部屋におもちゃないやろう〉と論ずるとそれは理解できるが、でも欲しいという気持ちは抑えがたいようで、「もうこ(来)うへんで」と軽く威したりしながらも、〈仕方ないなあ〉と呆然とする Th になぜか納得して、退室した。

#2 12日後 箱庭② Th が帰宅する時間になって、他児と一緒に来室し、再びミニカーが欲しいと言う。あげるわけにはいかないかと答え、「来ないといってもだめ?」と言ったあと、観念して、箱庭をすることになった。制作しながら父親とよく行くお寿司屋さんの話をする。「自分で取るねんで」と教えてくれ、〈いいなあ〉には得意気だった。途中で母親が来室し、胸を押さえながら、いなくなると不安になり、いじめられているのではないかと心配したのだと訴えられた。Th が何度も何度も謝ると、安心したからもうよいけれど、ただ不安で怖かったのだと告げられた。

箱庭では恐竜が登場する一方でおじいさんがのどかに読書しているのに気づき、「おじいさんが危ない」と言う様子には、今にも降り出しそうな気配があつたので、〈気づかないっか〉と言うと、そういうことにしかけるが、無理を感じ、「やっぱこれは気づく。どうしよう」とべそをかき、ミニカーが欲しいと言ったと

きのように Th にもそれをぶつける。

—絶体絶命—

#3 一週間後 箱庭③ 午前中ふらつとやってきたので、昼食後においでと約束した。なかなか来ないので誘いに行くと、「やめとく」と言ったが、すぐ母親に身振りで行っておいでと背中を押され、立ち上がった。母親はニコニコと送り出していた。

山から作り始めたのだが、最初からダイナミックで、エネルギーにあふれていた。クリスマスツリーを置いてから、「ありえない」と言う。〈ありえない世界もありだ〉と言ってみたが、「今日は本当の世界にする。人間がいらない動物の世界にする」と言いながら、仕上げた。それは箱庭②の問いに関する CI なるの答えだったのだが、さて、それはどんな結末であつたか。さらには現在の CI はどんな子どもになっているのか等については当日紹介することにする。

IV. 考察

1. 先入観なしに寄り添う態度の重要性

ユング心理学の夢解釈がフロイトの精神分析と異なる点は、無意識を一方的構子定規的に嵌め殺すような解釈をするのではなく、CI と Th が対等な立場で事象そのものに相対し、そこに潜む多義的な意味を考え活かしながら、CI の心の中で巻き起こっていることを自己治療的に方向づける点にあるだろう。しかし現状はせつかくの事例という現実を見ようとせず常識的解決でよしとしたり、【心不可得】とするなどの知性化が横行している。

2. 1. によって観えてくる異熟の原理

歴史的な源泉である哲学や宗教に還って考察するしかない性質のこころ(大拙 1954)の分析には補充法しかない。ただ、イメージ表現に神仏そのものが置かれるならば、わかりやすいのだが、現実はそのようではなく、阿頼耶識は異熟するのであり、既に仏教すら易学と融合しつつ、見立てやモドキとしてある意味では隠され(吉野 1992)、現代的な事物と重ね合わせながら具体的な表現として結実している。絶対絶命の境地からの脱出時ですらその例外ではなく、むしろそんなときこそ、駄洒落やユーモアを加味しながら、次元の違うものを一緒くた(一即多)にしつつ、小さな自我を救うといった原理がみられる。CI を脅えさせたゴリラに実際に襲われたかつてのフィールドワーカーたちもまた、顔面蒼白かつ必死の形相で逃走したつもりが、VTR に残る笑顔を見て驚いたという

よく知られたエピソードに見られるような反動形成の普遍性が日本人の無意識の異熟の仕方にはある。

3. CI の分身であるおじいさんを救ったもの

CI の魂を救うのに動き出した元型にはまだ名前がないのだが、成分は以下のようなものかもしれない。

①お供え 日本人には、神にお供えして待つという普遍的な祈りのスタイルがある。父親と一緒に食べたお寿司などを含んだお供え物の内容を観察することは異熟の原理に接近することにつながるだろう。

②火 易学的には火は女性であり、神であり、毘盧舎那仏を代表とする華嚴の世界の神々しさや太陽神アマテラスのイメージにも重なる。『崖の上のポニョ』でポニョを守ろうとする宗介をクライマックスでバックアップしたのは偏屈なトキ(ハイブリッドな命名)さんだったが、CI のおじいさんを救う成分を結集させ、最後の最後に背中を押したのも現実と非現実における 2 人の女性であつた。

③太鼓 幽霊(アニマ)は神出鬼没にみえて、実は太鼓がないと出現できないという暗黙のルールに縛られている。非現実的象徴の世界が開演する合図であり、木気(春の息吹のようなもの)の象徴でもある。

④二重世界 二人のおじいさんを繋ぐもの 自分で作った創造の世界に飛び込み、全身全霊で脅えながら、答えをつかんだ CI には敬意を表したい。その姿はまるで千尺の崖の上から横超する木にかじりついている小僧さんの抱える公案(百尺竿頭)のようで、二元(適応)論では絶対解けない。しかし箱庭②の問いの中にはすでにその答えが含まれており、予定調和的に得心したのである。日常と非日常をつなぐ平常底という場所もまた百尺竿頭の答えと一緒に存在している。

V. 文献

- 河合隼雄(1987)子どもの宇宙 岩波新書
 河合隼雄(1988)明恵を語る 日本放送出版協会
 上田閑照(編) 西田幾多郎哲学論集 岩波文庫
 鈴木大拙(1954)禅とは何か 角川文庫
 水野弥穂子(校注) 正法眼蔵 岩波書店
 竹村牧男(2002)ブッダの宇宙を語る 華嚴の思想 日本放送出版協会
 横山紘一(2001)心の秘密を解く 仏教の深層心理・唯識 日本放送出版協会
 吉野裕子(1992)隠された神々 古代信仰と陰陽五行 人文書院